

東亞儒學研究叢書 13

近世日本儒禮實踐的研究

以儒家知識人對《朱子家禮》的思想實踐為中心

田世民◎著



東亞儒學研究叢書 13

近世日本儒禮實踐的研究

以儒家知識人對《朱子家禮》的思想實踐為中心

田世民◎著



國家圖書館出版品預行編目資料

近世日本儒禮實踐的研究：以儒家知識人對《朱子家禮》的思想實踐為中心／田世民 著。

--初版--臺北市：國立臺灣大學出版中心 2012.04〔民101〕

311面；15*21公分。(東亞儒學研究叢書；13)

含名詞索引及人名索引

ISBN: 978-986-03-2225-5 (精裝)

1.儒家 2.家禮 3.日本

131.3

101005789

統一編號 1010100749

東亞儒學研究叢書 13

近世日本儒禮實踐的研究：

以儒家知識人對《朱子家禮》的思想實踐為中心

著 者：田世民

策劃者：國立臺灣大學人文社會高等研究院

「東亞儒學」研究計畫 (<http://www.eastasia.ntu.edu.tw>)

出版者：國立臺灣大學出版中心

發行人：李嗣涔

發行所：國立臺灣大學出版中心 (<http://www.press.ntu.edu.tw>)

法律顧問：賴文智律師

展售處：國立臺灣大學出版中心

10617 臺北市羅斯福路四段1號

電話：02-23659286 傳真：02-23636905

E-mail：ntuprs@ntu.edu.tw

國家書店松江門市 電話：(02) 2518-0207

國家網路書店 <http://www.govbooks.com.tw>

五南文化廣場 電話：(04) 2226-0330

責任編輯：莊士杰

封面設計：申朗企業有限公司(<http://lyonfish.myweb.hinet.net>)

出版時間：2012年4月初版

定價：新臺幣270元整

GPN: 1010100749

ISBN: 978-986-03-2225-5 (精裝)

著作權所有・翻印必究

辻本序（日文）

田世民君は、台湾の淡江大学文学修士（日本研究）の課程を終えた後、交流協会の奨学金を得て 2002 年に来日し、2003 年 4 月に京都大学大学院教育学研究科修士課程に入学した。それ以来、田君は、教育史研究室において、一貫して、日本近世思想史の研究を進めてきた。私はその研究室の担任教授として、田君の研究を直接指導してきた者である。本書の序文を書く機会を与えられた所以である。

田君は、2005 年 3 月に提出した修士論文「『文公家礼』に関する実践的言説」が高い評価で合格し、同年 4 月から博士後期課程に進学して順調に研究を深めてきた。博士後期課程 3 年次の 2008 年 3 月には、「近世日本における儒礼受容の研究—『文公家礼』をめぐる儒家知識人の思想実践を中心に」と題する論文によって、博士学位の審査に合格し、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程を修了した。博士後期課程 3 年次という制度上最短年次において博士学位論文に合格したのは、私の研究室においては、彼が最初である。

この間、2005 年には「京都大学教育学部同窓会国際賞」を受賞している。同賞は、京都大学大学院教育学研究科に在籍するもともと優秀な外国人留学生（年間1人）に授与される荣誉ある賞である。また、2005 年から3年間、「日本学術振興会特別研究員(DC)」に採用された。この研究員は、とくに優秀な博士後期課程在籍の大学院学生の研究と生活を手厚く支援する日本政府（文部科学省）の制度で、厳しい審査を経て、選ばれるものである。外国人留学生がこの研究員に採用される例は少なく、田世民君の際だった優秀さが認められたことを意味している。

2008 年、学位取得後、台湾での研究の出発点となった母校、淡江大学に助理教授として迎えられ、現在にいたっている。

本書は、京都大学に提出した博士学位論文の原稿に加筆修正のうえ、自ら中国語に翻訳して出版しようとするものである。

近世日本の儒家知識人は、儒教儀礼規範書『文公家礼』に対して、様々な受け止め方をしてきた。本書は、近世儒者知識人の『文公家礼』受容の多様な実態を解明したものである。なかでも喪祭礼に関わる思想的課題と向き合った知識人の多様な思想的位相を明らかにしている点において、大きな成果を示している。その際、入手しやすい公刊文献に限らず、稿本や写本など私文書の一次史料を調査・発掘し、その解読作業に基づいている。その地道な作業を重ねることによって、朱子『家礼』に向き合った儒家知識人たちの「実践的

言説」と、自ら実践した喪祭儀礼の様相を実証的に解明することができた。その結果、近世日本の知識人たちが、テキスト解釈の域を超えて、儒学思想を自ら人生において実践的に生きようとした思想家の実相を捉えることができた。さらに加えて、死と生の問題を切実な思想課題として思索した思想の深みも解明できた。

総じて本書は、新たな視座と領域を開拓したすぐれた研究であると言って間違いない。

以下まず、本書の内容を各章ごとに概括的に紹介しておく。

序章では、先行研究のレビューを行い、問題の所在と本書の目的を明確にしている。これまでの近世儒教儀礼研究の射程の狭さを指摘したうえで、近世知識人の『家礼』受容の思想史的意味を、たんに言説レベルに止まるのではなく、知識人が生活実践レベルでいかに生きようとしたのか、という視点から捉えることの必要性を強調している。

第一章では近世前期岡山藩儒者の熊沢蕃山の儒教儀礼（なかでも葬祭儀礼）に対する理解を、社会の現実に対応させた「水土論」理論の文脈に即して解明した。蕃山は、聖人の道の普遍性を前提にした上で、日本社会の現実と隔たりがある儒礼、とくに『家礼』に基づく葬祭礼実施に消極的であったこと、当時の「人情時勢」の観点から火葬を容認し、儒教的葬祭礼を規範に即した厳格な実践を主張する

のではなく、経世安民の立場から柔軟に捉えていたこと、を解明している。また従来蕃山の著書とされてきた『葬祭辨論』を、書誌学的批判と内容の検討によって、蕃山著作説が疑わしいことを指摘し、むしろ崎門の浅見綱斎が火葬批判の文脈でこの書に言及したことの重要性を明らかにした。その上で『葬祭辨論』は、著者の問題より、近世前期の代表的火葬批判書だったこと、及び崎門の『家礼』に関する実践的言説に強い影響を与えたという点で、重要な書だったことを指摘している。いずれも本書の創見である。

第二章・第三章では、崎門派の朱子『家礼』の理解と、浅見綱斎(崎門派＝山崎闇斎学派)の『家礼』実践の実相を明らかにしている。第二章は、崎門派は、自らの実践レベルで朱子『家礼』を理解しようとしたことを解明している。とりわけ喪祭礼式の工夫と儒教的死生観、鬼神観に着目して、崎門派が喪祭礼に人倫秩序維持の目的を見出したことを指摘している。現実社会に適合的な「水土論」を主張した熊沢蕃山と、『家礼』に依拠しながら明儒説を大いに参照した中村惕斎とは異なり、崎門派は明儒の説を排除し、限りなく朱子『家礼』を忠実に受け止めようとしたことを説得的に論証している。

第三章は、浅見綱斎の朱子学的な礼の実践を、その『家礼』に関する著述と講義と礼俗観に着目して解明している。綱斎が、世俗の仏葬と対抗・葛藤のなかで朱子『家礼』に基づく喪祭礼の確立に奮闘したことを明らかにし、さらに綱斎が朱子学的死生観にもとづい

て実践し、朱子学を自らの身において主体的に生きようとしたことを指摘した。

第四章では、水戸藩二代藩主徳川光圀が藩士に頒布した喪祭儀のマニュアル書『喪祭儀略』の諸本の分析と、後期水戸学の喪祭礼に関する実践的言説の検討を通じて、明の文化を自覚的に取入れようとした水戸藩の儒礼受容を明らかにしている。2系統の『喪祭儀略』写本の変遷を、実際の葬儀のあり方や朱舜水の影響に着目して解明し、後期水戸学の儒教的祭祀論が水戸の儒礼受容を前提に展開したものであることを指摘している。

第五章と第六章では、大坂の町人を基盤とした懷徳堂知識人が、市井の中に生きながらいかに喪祭礼の実践に取り組んだかを解明している。第五章は、中井家代々の葬祭儀の記録「中井家歴代裏事録」を駆使し、中井竹山が、父贅庵著『喪祭私説』に施した注記に着目して、懷徳堂知識人が排仏ながらも世俗の習俗と調和を図ろうと努めていた家礼実践の実態を解明している。第六章は、懷徳堂知識人が儒礼祭祀をいかに実践したのかを、『喪祭私説』と「中井家歴代裏事録」および並河寒泉の日記『居諸録』をもとに解明するとともに、懷徳堂知識人の儒礼祭祀活動の「日常性」を指摘している。懷徳堂知識人の「無鬼論」は世間の俗信的な「人情」を克服し、祖先を敬慕し祭る心情の純粋性を求めようとする「無鬼こそ祭祀」の主張であることを明確にしている。

終章では、朱子『家礼』が儒学思想に基づく人倫秩序を維持するための最も重要な通過儀礼の書としてあったことを前提に、人生の通過儀礼を真剣に捉え、「思想を生きる」近世日本の知識人たちの諸相を改めて確認した。その上で、近世日本では儒礼は受容されず、そのため死生観を展開せず、儒教のもつ宗教性は理解されなかったとするこれまでの通説を批判し、近世日本の知識人も、それぞれが喪祭礼という切実な課題にさまざまに取組み、思想的営みを行っていたとの結論を提出して、本書は閉じられている。

本研究が達成した学問上の意義について、以下、解説的に述べておく。

従来通説では、中国とは社会的原理を異にしていた近世日本では、中国社会を前提に構成された儒礼を受容することは困難であり、せいぜい儒礼の文献的解釈と思想の言説レベルにとどまり、日本社会には十分に機能することはなかった、とされてきた。これに対して、本研究は、『文公家礼』(以下『家礼』)に対する近世儒者たちの理解と実践を検討し、それによって、儒家知識人たちが死者の葬祭儀礼において、儒礼にもとづき実践的に立ち向かってきたさまざまな事実を解明した。つまり本書は、通説に対して大きな一石を投じた創見に満ちた研究である。中でも以下の点において、とくに高い獨創性がみられ、高く評価される。

- 1、まず主題と方法について。儒礼の実践書『家礼』をいかに受容したかという問題を、思想の実践を示す指標ととらえ、近世儒者の思想的位相を解明することに成功した。つまり本書は、『家礼』を注釈する文献解釈学にとどまらず、それを自ら主体化し「朱子学を生きた」思想と捉える視座を設定した。それは、これまでの、テキストに即した思想の再構成的研究や思想の社会的機能の研究、あるいは儒教受容史の研究のいずれとも異なる、新たな視座と方法の提示である。
- 2、死者・先祖への葬祭礼は儒教の孝道德の実践であり、それが人倫社会構成の基礎と意味づけられる。本主題は、当該儒者の儒学への向き合い方にとどまらず、死生観や生命観、道德論、経世論まで見通す思想的指標となり得ている点でも着眼点のすぐれた研究である。また近世儒学が死生論、宗教性を欠落させたという通説に対しても、本書は、家礼をめぐる朱子学者の思想的検討によって、大幅な修正を迫っている。
- 3、具体的には熊沢蕃山、崎門派儒者（山崎闇斎・浅見綱斎、若林強斎）、中村惕斎、水戸学（後期水戸学を含む）、懷徳堂（中井家、並河寒泉、山片蟠桃）などの儒家知識人の言説と実践を比較し、その思想的な位相が明解にされている。それは日本近世社会の中での儒教の持つ

多義性と可能性を、動態的に提示したものと評価できる。

4、本研究は、仏教式葬祭礼が制度化された近世社会において、儒礼実践の困難性やそこに生じる葛藤の諸相を具体的に解明している。その作業は、これまでの思想言説を再構成する思想史と異なり、儒者たちが思想に従って現実の社会で実践的に生きようとした営みを動的にとらえており、「思想の社会史」を新たに開拓していると評価できる。

5、史料について。依拠する家礼関係の史料・文献の大半は未公刊のもので、稿本や写本の形で全国に散在する私文書類であり、これまで参照されることが少なかった。本研究は、地道な史料調査とその解読によって事実を解明し、それを『家礼』の記述と比較対照して論理化した成果である。その意味で、本書は実証性の高い確かな著作と評価でき、以後の儒礼研究の画期をなす業績である。その実証例として、たとえば蕃山著として全集収録済みの『葬祭辨論』が、その史料批判と内容分析によって蕃山著作でないことを実証し、崎門派、とくに浅見綱斎の葬祭論に影響を与えた著作であると断定している。また水戸藩の『葬祭儀略』に関する7冊の写本の精緻な分析とその意味づけも鮮やかである。懷徳堂の儒

礼にもとづく葬祭儀礼の詳細な事実解明の精緻さも、特筆に値する。

- 6・最後に、本研究の広がりと可能性について。本書は、日本近世思想を対象としている。その意味においては確かに日本思想史研究にほかならない。しかし本書は日本思想史研究のみに回収されるものではない。『家礼』は東アジア儒教圏に共有された、生活上の実践的なテキストである。したがって、近世日本の儒家知識人の当書への向き合い方は、中国や朝鮮の儒家知識人と同一地平に立ったものととらえられる。したがってそこには東アジアの思想に対する動態的把握の視点が存在している。つまり『家礼』テキストの理解とその実践に指標を見出す本書の視座は、たんに日本思想に閉じられた研究ではなく、広く東アジア儒教思想の比較研究に開かれたものであり、その意味において、東アジア儒教圏の比較社会史研究を可能とする。しかも本書は、それを自覚的に目指している。

従来の儒学受容史研究は、近世儒学が「普遍的」中国儒学から離れて「日本化」し、そこに日本的な特質（日本的特殊性）を見いだす一種の「一国思想史」の語りに回収する傾向が顕著であった。しかし本書は、この「一国思想史」の批判的克服を目指しており、今後、日本だ

けではなく、中国、台湾、韓国、ベトナムなども対象とした、スケールの大きい東アジア儒教思想史研究、あるいは比較社会史研究の展開が十分に期待できる。

なお、本書に新たな2章を加えた日本語版が、2012年3月に京都大学の助成金を得て、出版される(ぺりかん社、東京)。もとより、本書の高い学術的価値が認められ結果である。かつての指導教員として、本書が、日本と台湾でのほぼ同時の出版となったことを喜ぶとともに、本書に序文を寄せることのできた幸せを、感謝したい。本書の出版をひとつの跳躍台として、田世民君の研究が、今後、東アジア全体に視野を広げてさらに発展していくことを確信している。

辻本 雅史

京都大学教授

2011 年 12 月

辻本序（中文）

田世民君在完成台灣淡江大學文學碩士（日本研究）的課程後，在 2002 年考取交流協會的獎學金赴日留學，並於 2003 年 4 月考進京都大學大學院教育學研究科碩士課程。此後，田君在教育史研究室一貫埋首於日本近世思想史的研究。本人擔任該研究室的教授，實際指導了田君的研究。這是我有機會撰寫這篇序文的緣由。

田君在 2005 年 3 月提交的碩士論文（《近世有關《文公家禮》的實踐論述——以崎門派為例》）以高度的評價通過考試，自同年 4 月起晉升博士後期課程，順利地深化研究工作。之後，於博士後期課程 3 年級的 2008 年 3 月，以題為《近世日本儒禮實踐的研究——以儒家知識人圍繞《文公家禮》的思想實踐為中心》的論文，通過博士學位的審查，完成了京都大學大學院教育學研究科博士後期課程。以博士後期課程 3 年級這制度上最短時間通過博士學位論文審查的，在我的研究室他是第一位。

在這段留學期間當中，他在 2005 年獲得了「京都大學教育學部同窗會國際獎」。這個獎是頒發給京都大學大學院教育學研

究科在學的最優秀的外國人留學生（每年一名）的榮譽獎項。此外，自 2005 年起獲聘了 3 年的「日本學術振興會特別研究員（DC）」¹。這個研究員是日本政府（文部科學省）特別提供給優秀在學博士生予優渥研究和生活支援的制度，在經過嚴格的審查後選拔出來的。外國人留學生獲聘為此項研究員的例子極為罕見，顯示田世民君的格外優秀得到肯定。

田君在 2008 年取得學位後，返台回到研究出發點的母校——淡江大學，擔任助理教授至今。

本書是田君在提交給京都大學的博士學位論文的基礎上，大幅改寫並自行翻譯為中文、出版的著作。

近世日本的儒家知識人對於儒教禮儀規範書《文公家禮》有各式各樣的接納方式。本書的目的即是為了闡明近世儒家知識人在接受《文公家禮》時所呈現的多樣實態。其中，在釐清知識人在面對有關喪祭禮的思想課題所呈現的多樣思想面向這一點上，揭示了重大的成果。在從事這項研究時，並不限於容易入手的已出版文獻，而著手調查、發掘稿本和抄本等私人文書的第一手史料，並進行解讀的工作。在不斷累積這樣踏實的工作，始能闡明儒家知識人們面對朱子《家禮》的「實踐論述」、以及自我實踐喪祭禮儀的情況。結果，得以超越文本解釋的範疇，掌握了近世日本知識人在自我人生當中，意圖具體實踐地體現、〈活出〉儒

學思想之思想家的真實面貌。更進一步，也得以闡明了將死與生的問題視為迫切的思想課題、進行思索之思想的深刻內涵。

總而言之，本書無疑是一項開拓新視野與領域的傑出研究。

以下，首先概括介紹本書的各章內容：

緒論進行先行研究的回顧，並明確指出問題的核心與本書的目的。除了指出前此近世儒教禮儀研究視野的侷限性，亦強調近世知識人接受《家禮》的思想史意義，不應僅止於論述的層面，更應從「知識人在生活實踐的層面上如何生活？」這個視角來掌握的必要性。

第一章以近世前期岡山藩儒者熊澤蕃山為對象，根據其為了適應社會現實所提出的「水土論」理論的脈絡，闡明了蕃山對儒教禮儀（尤其是葬祭禮儀）的理解。本章指出，蕃山以聖人之道的普遍性為前提，對於與日本社會現實有所隔閡的儒禮、特別是根據《家禮》而實施葬祭禮秉持消極的態度，並且從當時的「人情時勢」的觀點容許了火葬，不主張根據規範以嚴格實踐儒教葬祭禮，而是從經世安民的立場有彈性地看待禮儀的問題。而且，通過文獻學的批判與內容的檢討，指出過去一直認為《葬祭辨論》是蕃山著作的說法的疑點，並且闡明崎門派的淺見綱齋在批判火葬的脈絡下言及此書的重要性。進而指出，相較於《葬祭辨論》著者的問題，此書不但是近世前期代表性的火葬批判書，並

且在強烈影響崎門派有關《家禮》的實踐論述這一點上，都是相當重要的著作。這些都是本書的創見。

第二章、第三章闡明了崎門派儒者對朱子《家禮》的理解、以及淺見綱齋（崎門派＝山崎闇齋學派）實踐《家禮》的實際情況。第二章分析崎門儒者力圖在自我實踐的層次理解朱子《家禮》的事實。尤其，著眼於喪祭儀式的摸索嘗試與儒教的生死觀、鬼神觀，指出崎門儒者從喪祭禮中發現維持人倫秩序的目的。本章具有說服力地論證：相異於主張適應現實社會的「水土論」的熊澤蕃山、以及依據《家禮》而大大參照明儒學說的中村惕齋，崎門學者排除明儒學說，力圖無比忠實地接受朱子《家禮》。

第三章著眼於淺見綱齋有關《家禮》的著述、講義和禮俗觀，闡明了綱齋之朱子學式的禮儀實踐。本章揭示綱齋在與世俗的佛葬對抗、糾葛之中，根據朱子《家禮》確立喪祭禮而奮鬥不已的事實，並且指出綱齋即朱子學的生死觀以實踐、力圖在自我生命中主體性地體現朱子學的姿態。

第四章通過對水戶藩二代藩主德川光圀頒予藩士的喪祭禮儀指南書《喪祭儀略》諸本的分析，以及後期水戶學有關喪祭禮之實踐論述的檢討，分析了水戶藩自發性地採納明朝文化的儒禮實踐。本章著眼實際葬儀的型態、以及朱舜水的影響，闡明了《喪